劇場版艦これ２　～鉄底海峡の影～

蒼海　輪斗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次い号作戦を終え、南方へ進出することになった呉鎮守府。次なる目的地は、かつて先の大戦で多くの艦艇が沈んだ海域〝鉄底海峡〟。この海域には今までの影の艦隊とは比べ物にならない、さらなる影の脅威が潜んでいた…。

果たして呉鎮守府は誰も欠けることなく、戦い抜くことができるのか…

目次

第一部　三号作戦 ―― 1
第二部　影姫 ―― 14
第三部　闘い、そして終戦 ―― 33

第一部　三号作戦

鉄底海峡。
ソロモン諸島サボ島の南方、ガダルカナル島の北方に存在する海域。かつての先の大戦で多くの艦艇がこの海域に沈み、その水底が鋼鉄に覆われていることからこの名がついた。

サボ島周辺海域　ガ島近海
暗闇のなか、何隻もの艦艇がこの海域を航行している。影の艦隊の輸送艦隊だ。鮫のような外見に大量のドラム缶を体に装備した〝輸送艦二一型〟が何隻もガ島の泊地に停泊している。
泊地の入り口では、影の艦隊の重巡二十一型が二隻、駆逐十六型が四隻哨戒にあたっていた。泊地防衛の南方部隊だ。
重巡二十一型１　「ねえ、なにかみえない？」
重巡二十一型２　「味方の駆逐艦だろう。気にすることはｎ」
重巡二十一型が言い終わらないうちに、パッと空が明るくなった。
重巡二十一型２　「!?」
照明弾だ。照明弾が投下されたため空が明るくなったのだ。
重巡二十一型１　「各艦、戦闘用意！」
重巡二十一型が命令したとき、
ババーン!!　ババーン!!
巨大な爆発音が響き、発砲炎がみえた。砲撃が開始されたのだ。

出羽　「初弾、夾叉（きょうさ）!!次弾装填急いで！」
曙　「分かってるわよ！」
影の艦隊に対して、砲撃を行ったのは呉鎮守府所属の精鋭艦隊〝第七艦隊〟だった。旗艦である出羽がさらなる指示を出す。
出羽　「十六夜ちゃん！立春ちゃん！魚雷発射急いで！」
十六夜　「分かりました！」
立春　「了解です！」
十六夜たちが試製六連装酸素魚雷を発射する。合計十二本の魚雷が影の艦隊に向けて放たれた。放たれた魚雷はまっすぐ駆逐十六型に着弾した。
駆逐十六型　「がああああああああああああああああ!!」
駆逐十六型が叫び声をあげながら、沈んでいった。
十六夜　「やったあ!!」
一方、出羽ともう一人の艦娘、馬見ヶ崎が重巡二十一型に対して砲撃を続行していた。
ドガァーーン!!
重巡二十一型２　「!?」
重巡二十一型に２５糎（センチ）砲弾が命中する。馬見ヶ崎が放ったものだ。
馬見ヶ崎　「え、嘘…。当たったんですか…？」
本人はあまりうれしくないようだ。
重巡二十一型２　「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ!!?」
重巡二十一型が轟沈した。出羽の放った５１糎砲弾が命中したからだ。
曙　「これでここの艦隊は壊滅したわね。」
出羽　「そうですね。しかし、まだ泊地内に敵艦隊はいます。十六夜ちゃん、お願いします。」
十六夜　「分かりました～！」

泊地内

軽巡二十型　「我、発砲炎及ビ砲跡ヲ確認。敵艦隊ノ襲撃ノ可能性アリ。十分ニ警戒サレタシ。」

泊地入り口を見張っていた軽巡二十型が、第七艦隊と南方部隊との戦闘の発砲炎を発見し旗艦である重巡二十一型に報告した。しかし、

重巡二十一型　「何を言っている。どうせ島に対する砲撃だろう。たとえ敵艦隊だとしても少数だろう。」

軽巡二十型　「シカシ、先程カラ南方部隊トノ通信ガ途絶エテイルノデ…」

重巡二十一型　「分かった。今から南方部隊に連絡をと」

カチャーーーー!!

突然周囲が明るくなった。重巡二十一型が目を凝らしてよく見ると、明るさの正体が分かった。探照灯だ。十六夜が探照灯を北方部隊に照射しているのだ。

軽巡二十型　「敵艦隊!?」

重巡二十一型　「待て！友軍の混乱かもしれない。連絡をとってみる。」

十六夜　「出羽さん！敵艦から信号です。『我、味方なり』です！」

出羽　「どうやら私達のことを味方だと勘違いしているみたいね。」

これは好都合だ。すると

曙　「出羽さん！馬見ヶ崎さんたちが遅れてます！」

十六夜　「ええ!?なんで！」

実は先程、一隻の重巡二十一型が馬見ヶ崎に向けて突撃を仕掛けてきていたのだ。衝突を避けるために馬見ヶ崎は変針、これに立春もついていったようだ。

出羽　「しかたありません。馬見ヶ崎さんたちがくる前

に攻撃を開始しましょう。敵が味方だと思いこんでいるうちに。」
十六夜　「は～い！」
そして、十六夜たちは敵艦隊の右舷側から砲撃を開始した。
重巡二十一型　「!?」
敵艦を友軍だと信じ込んでいた、重巡二十一型は瞬く間に５１糎砲弾、１３糎砲弾、１２．７糎砲弾の一斉射撃を受けた。
駆逐十六型　「がああああああああああああああああああああああああああああ!!?」
早速一隻の駆逐十六型が撃沈された。重巡二十一型はようやく敵艦隊だと確認し、反撃を開始した。しかし、反撃を開始した頃には周囲には友軍の姿はなかった。
重巡二十一型　「（くそっ！失態だ。この失敗は私にある。なんとしてでも泊地への侵入は阻止しなくては…）」
十六夜　「そこ～～～～～～～～!!」
十六夜が被弾で動きが鈍くなっている重巡二十一型に魚雷を発射した。夜戦での魚雷は発見しづらい。瞬く間に重巡二十一型に着弾した。
重巡二十一型　「ぐあああああああああああああああああああああああああ!!」
重巡二十一型は叫び声をあげながら撃沈された。
軽巡二十型　「クッ、旗艦ガヤラレタカ…」
重巡二十一型　「なにを言う！まだ私がいる！なにがあっても敵艦隊を泊地内に入れるな！」
軽巡二十型　「ワカッテイマス！」
しかし、影の艦隊にさらなる攻撃が加わる。
馬見ヶ崎　「敵艦隊発見です…」
立春　「攻撃開始します！」
なんと馬見ヶ崎たち海域に到着、残存していた影の艦隊の左舷側から攻撃を開始したのだ。よって影の艦隊は、十六夜たちと馬見ケ崎たちの二艦隊に挟撃（きょうげき）されることになった。
泊地前に次々と巨大な爆発音が響く。この攻撃により、影の艦隊は

南方部隊、北方部隊のすべてが壊滅状態になった。
出羽　「敵艦隊壊滅確認です！」
十六夜　「これで泊地内にに侵入できますね。」
馬見ヶ崎たちと合流した第七艦隊は遂に泊地内に侵入した。砲撃を容易にするために馬見ヶ崎は探照灯を照射した。
輸送艦二一型　「!?」
探照灯で照らされた先には、泊地を埋め尽くすほどの数の輸送艦二一型が停泊していた。
出羽　「撃ち方、始め！」
５１糎砲弾、２５糎砲弾、１３糎砲弾、１２．７糎砲弾、さまざまな砲弾が影の艦隊の輸送船団に襲いかかる。
影の艦隊の輸送艦二一型は防衛用に搭載されている１０糎単装砲で応戦するも所詮焼け石に水だ。次々と輸送船団は火に包まれていった。
これにより第七艦隊は敵艦隊、敵輸送船団を壊滅することに成功したのだった。

ショートランド諸島海域
十六夜　「ああ～、疲れた～」
出羽　「でも作戦は成功しましたし、潜水艦に気を使う必要もありません。そうですよね馬見ヶ崎さん。」
馬見ヶ崎　「はい…。でも、もしものことがあったらどうすれば…」
曙　「心配することはないんじゃないですか。」

今、第七艦隊の上空には四機の瑞雲が飛行している。爆弾のかわりに爆雷をそれぞれ二発づつ懸吊（けんちょう）している。馬見ヶ崎が対潜用に発艦させておいた瑞雲だ。

馬見ヶ崎　「私よりも駆逐艦である十六夜さんたちのほうが対潜には向いていますし、私の瑞雲は気休め程度にしかなりません…」

十六夜　「何言ってるんですか！あるだけでも心強いですよ！」

出羽　「そうですよ。自身持ってください。」

そうこう馬見ヶ崎を励ましていると、上空から巨大なエンジン音が聞こえてきた。

立春　「なんでしょうか？」

全員が空を見上げると、そこには旧海軍の使用していた大型陸上攻撃機〝連山〟が六機の零戦とともにまっすぐショートランド泊地の方角に向け飛行していった。

出羽　「提督が到着したみたいですね。」

連山機内

栗林　「提督、ショートランドが見えてきましたよ。」

提督　「あ～、ようやく着いたか。」

栗林　「なぜならラバウルから５０６キロほど離れてますから。」

操縦士　「提督、そろそろ降りる準備をしてください。」

提督　「はい。分かりました。」

提督が降りる準備を始めた。

ショートランド泊地　飛行場

整備兵1　「連山がきたぞ～！」
整備兵2　「早くしろ～！」
整備兵たちが滑走路に向かって走っていく。その光景を後ろから整備兵長の北村がみていた。北村もショートランドに移動していたのだ。
連山がゆっくりと降下し、滑走路へと着陸した。護衛の六機の零戦も、一機ずつ滑走路へと着陸していった。着陸した連山と零戦に整備兵たちが近づき、零戦は整備が開始された。
提督は連山から降りると、あたりを見回した。朝の光が眩しい。夜間の三時頃に出発したため、三時間ほどかけてショートランドに到着したのだ。
提督　「きれいなところだな…」
栗林　「そうですね。ここで戦争が起きていたなんて信じられませんね。」
ショートランド島は、大戦中日本軍の占領下に置かれ軍事用に使用された島だ。今でも島のあちこちには零戦の残骸や戦車の車体が海に沈んでいたりしていて戦争の爪痕が残っている。
提督　「それじゃあ、庁舎に入るか。」
栗林　「そうですね。」
提督と栗林は庁舎に向けて歩きだした。

庁舎内
出羽　「以上が海戦の戦果及び被害です。」
長門　「分かった。下がっていいぞ。」
出羽　「失礼しました。」
報告を済ませた出羽が部屋から出ていく。
金剛　「テートクはまだデスカー!!」
長門　「もうじきくるから待っていろ。」

金剛　「うう～」
十六夜　「そういえばさっき連山が飛んできたからもう近くにいるかもしれないですよ。」
提督　「もういるけどな。」
長門　「っうおっ!?いつの間にですかっ!?」
栗林　「出羽さんが出た時からですけど…」
金剛　「テートクー!!」
金剛が提督に抱きついていった。かなりの勢いだったのにも関わらず、提督はしっかりと受け止めた。
響　「金剛さん、少しは司令官から離れてよ。」
響は少し、不満そうだ。（艦これ２　光の絶望と影の希望では十一話で、響と提督はケッコンしています）
金剛　「いやデース！最近響はテートクとずっと一緒にいたじゃないデスカー！」
響　「うっ…」
金剛　「一人だけテートクを独占するのはずるいデース！」
栗林　「そろそろ作戦について話したいんですけどいいですか？」
終わりそうにない言い合いをみて、栗林がそう言った。
提督　「そうだな。早く編成も決めたいしな。」
栗林　「なので、ふたりとも提督から離れてください。」
↑半ギレ
響・金剛　「はい…」
栗林はそう言いながら、響と金剛を提督から引き離した。
提督　「それじゃあ話を始める前に、十六夜。昨日の敵輸送船団撃滅任務ご苦労さま。」
十六夜　「は～い。ありがと～。」
栗林　「それでは作戦について話します。　今回の作戦は第二次い号作戦の成功により敵航空戦力は壊滅、敵戦艦群も甚大な被害を被っています。それを機に南方に進出、鉄底海峡付近から出現

している影の艦隊の殲滅が第一目的です。そしてガダルカナル島の多国籍軍の救出が第二目的、そして南方海域に存在する豊富な資源の確保が第三目的です。」

長門　「状況によっては多国籍軍の救出が優先される可能性もある。」

十六夜　「人命も大切だけど、被害を拡大させないためにも影の艦隊は撃滅しないといけないね。」

提督　「そうだな。どっちにしろ影の艦隊を殲滅すること。それが主目標だな。」

栗林　「作戦名は〝三号作戦〟です。」

ガ島近海　鉄底海峡

何隻もの影の艦隊の潜水空母７００型が浮上している。どうやら哨戒任務にあたっているようだ。

潜母７００型１　「コチラ潜母７００型。周辺二以上ハ無シ。哨戒任務ヲ続ケル。」

潜母７００型２　「ソウイエバ日本近海ノ艦隊ハ全滅シタソウダ」

潜母７００型３　「残ッテイルノハ、我々ダケノヨウダゾ。」

潜母７００型たちがそんな会話をしていた。すると

???　「お前たち、何をしている？」

今までの影の艦隊とは違う雰囲気を放つ、人形の艦が言った。両腕には飛行甲板のようなものを装備しており、頭には真っ黒の軍帽をかぶっている。

潜母７００型１　「!!～～様!?」

潜母７００型２　「何故コチラニ！」

???　「今はそんなことは聞いていない。我々だけ残っているからなんだ？この海域も防衛できないとでもいうのか？」

そう言って、彼女は冷え切った瞳を潜母７００型たちに向けた。
潜母７００型３　「イイエ！ソウイウ訳デハ…！」
???　　「なら与えられた任務をこなす、それだけだ。しっかり哨戒任務にあたれ。」
潜母７００型達　「了解!!」
潜母７００型たちがそう言うと、彼女は水中へと潜り、姿を消した。

栗林　　「なんだか、嫌な予感がします。」
提督　　「ああ、そうだな…。」
ショートランド泊地　庁舎前

長門　　「以上が作戦の内容だ。作戦開始は明日。準備を怠るな。」
長門が全艦娘に向け説明を終え、解散の号令をかけた。解散の号令がかかったため、艦娘たちがその場から離れようとしていた。

すると栗林が、
栗林　　「今から呼ぶ皆さんは少し集まってください。」
と、艦娘たちに声をかけた。
栗林に呼ばれた艦娘は比叡、霧島、吹雪、綾波、暁、夕立の六人だった。実はこの六人はあることを共通してもっていることがある。〝史実でこの海域に沈んだ〟ことである。
霧島　　「栗林補佐官。どうしたんですか？」

夕立　「なにか用事でもあるっぽいっ？」
呼ばれたことに当の六人は疑問に思っているようだ。そこで栗林が口を開く。
栗林　「今回は皆さんには注意してもらいたいことがあります。」
吹雪　「なんですか？」
栗林　「ここにいる皆さんは影の艦隊の攻撃を受け、中破の状況に陥ったらすぐさま撤退してください。」
綾波　「どうしてですか？」
綾波の問いかけに、今度は提督が答えた。
提督　「ここの海域は油断ができない。お前たちならわかるだろ？」
全員　「!!」
提督　「俺の勝手かもしれないが、海域の制圧よりお前たちの命のほうが大切だと俺は思っている。」
比叡　「司令…」
栗林　「任務遂行より命です。」
栗林が言った途端に
暁　「もお～～～～～！暁は子供じゃないんだからそんなに心配することないわよ～！」
栗林　「えっ!?」
霧島　「そうですよ。確かに自分たちの命も大切ですし提督が心配する気持ちも分かります。」
夕立　「でもだからこそ頑張るっぽいっ！」
吹雪　「そうですよ！そのための私たち艦娘ですから！」
栗林　「皆さん…」
提督　「でも無理はするなよ。それだけは約束してくれ。」
全員　「はい!!（ぽいっ）」

その夜
庁舎内
提督　「明日か…。」
提督は、窓から闇に染まる海を眺めながら呟いていた。艦娘たちは明日に備えて出撃の準備をしている。提督のいるこの部屋には提督以外誰もいない。
提督　「(今回の作戦はかなり大規模だ。ガダルカナル島の多国籍軍の救出が最重要任務。さらにこの海域の奪取も必要だ。…かなりの被害が予想されるな。)」
現在、ガダルカナル島にはアメリカ軍を主力とした陸上部隊約2万人が取り残されている。連日、影の艦隊の影の富嶽により空襲を受けており、全滅の危機に瀕している。
提督　「(早急なる救助が必要だな。)」
すると、ドアがノックされた。
提督　「誰だ。」
ドアが開き、入ってきたのは栗林と長門だった。
長門　「提督。明日の作戦についてもう一度確認をしてもらいたく。」
提督　「ああ、そうだな。」
栗林　「まずは第七艦隊が先行していきます。そして影の艦隊の前衛艦隊と交戦、この間に海上自衛隊、航空自衛隊によるガダルカナル島の多国籍軍救出作戦を開始。それと同時にガダルカナル島を空襲していた富嶽爆撃隊の発着地であるツラギ島飛行場を戦艦群で艦砲射撃、無力化し、救出作戦中に爆撃がこないように防ぎます。第二艦隊はガダルカナル島周辺を警戒、救出作戦終了後、同海域の奪還を開始します。」
提督　「明日からの大まかな流れはこうだな。」
長門　「そうですね。うまくいくといいですね。」

栗林　「うまくいけば、ですね。」

三号作戦開始まで八時間

第二部　影姫

三号作戦は予定通り第七艦隊の先行から作戦通りに開始された。そのままガダルカナル島海域に到達、後続の海上自衛隊救出艦隊と航空自衛隊救出部隊が多国籍軍の救出を開始した。救出作戦は順調に進み、その日の日没にはほとんどの要救助者の救出に成功した。

出羽　「それではこれより、周辺海域の哨戒を開始します。」

十六夜　「は～い。」

日没後、出羽が旗艦を務める第七艦隊が、ガダルカナル島近海の哨戒を開始した。

大永　「対潜哨戒機も発艦させておくわね。」

出羽　「ええ、お願いします。」

馬見ヶ崎　「じゃあ…私も瑞雲を発艦させておきますね…。」

馬見ヶ崎も対潜戦闘用に、爆雷を搭載させた瑞雲を発艦させた。瑞雲が空を舞う。

曙　「これで少しは潜水艦に気を使う必要がなくなったわね。」

曙がそう言った。すると十六夜が、

十六夜　「そういえば提督から影の艦隊の資料が渡されてたよ。これ。」

と十六夜がある資料をみんなに見せた。

影の艦隊　主力艦艇

魚雷艇　甲型改／乙型改　（体力　２５）

全長が２５ｍほどの大型の高速魚雷艇として建造された。武装は甲乙共通では１０ｃｍ単装砲一門、魚雷であり、甲型改のみ魚雷を四発搭載可能。乙型改は二発のみ。またそれぞれ甲型改は２５ｍｍ三連装機銃、乙型改は２５ｍｍ連装機銃を装備している。

艦娘との戦闘では、その高速性をいかして、奇襲攻撃や偵察などを主任務としている。

駆逐艦　十六型　（体力　３５）

全長が１８０ｍ超えの大型の艦隊型防空駆逐艦。１３ｃｍ砲と長１０ｃｍ連装高角砲を装備し、対空、対潜、対艦能力は通常の駆逐艦を超越しており、その戦闘力は阿賀野型軽巡洋艦にも引けを取らない。また、試製六連装魚雷発射管を二基搭載し、強力な雷撃能力を誇る。

艦娘との戦闘では、影の艦隊の主力駆逐艦として登場し、深海棲艦の駆逐艦たちをはるかに上回る攻撃力と防御力を駆使する万能型の駆逐艦として戦闘を行っている。

軽巡洋艦　二十型（体力　６５）

全長が１８０ｍほどの、艦隊防空型軽巡洋艦。１５ｃｍ三連装砲を装備し、対艦能力は重巡洋艦にも負けない高性能を発揮した。

艦娘との戦闘では、影の艦隊の水雷戦隊の主力として登場、呉鎮守府の第六駆逐隊を追撃したり幅広い海域に確認されている。弱点は旋回性能が低いことと、対潜能力が低いこと。

重巡洋艦　二十一型（体力　１１０）

全長２１０ｍほどの、巡洋戦艦にも比肩するほどの性能をもつ重巡洋艦。２５ｃｍ三連装砲を装備し、長大な航続力と火力をもち、影の艦隊で影姫以外で唯一、艦娘を影化させることができる影の砲弾を使用することができる。

艦娘との戦闘では、影の砲弾を使用し、艦娘たちを夜戦などで苦しめている存在である。

戦艦　百十型　（体力　１６０）

全長２６３ｍ超えの世界最大の戦艦、大和型の改良型、〝超大和型戦艦〟として建造され５１ｃｍ砲を搭載している。ビックセブンと言われた長門型四隻分の戦闘力を持っている。

艦娘との戦闘では、その強大な火力、防御力を発揮し、影の艦隊の旗艦のような役割をしており、各鎮守府の提督を苦しめている。

戦艦　七十型（体力　２３０）

全長２３０ｍほどの空母殲滅型高速戦艦。巡洋戦艦型と航空戦艦型の二種類が存在している。長門型と同様に４１ｃｍ砲を搭載しており、試製六連装魚雷発射管を四基搭載、航空戦艦型では影の瑞雲を

２５機ほど搭載している。
艦娘との戦闘では、影の艦隊の司令官的存在で戦闘を行ったり、空母艦娘を積極的に攻撃し、各鎮守府の空母戦力を壊滅に追い込もうと企んでいる。
潜水空母　七百型　（体力　３０）
全長が１５０ｍほどの巨体を持つ、世界最大の潜水艦に航空機を搭載したのが潜水空母であり、武装は１０ｃｍ単装砲、魚雷発射管八門を搭載しており、各艦載機を搭載することができる。
艦娘との戦闘では、影の艦隊の潜水艦でありながら軽空母としても運用され、航空機による突然の空襲を主戦術として用いて艦娘たちを轟沈へと追い込もうとしている。しかし、防御力は駆逐艦よりも弱く、艦載機の発艦にも時間がかかるため意外と弱点は多い。
出羽　「これは…」
十六夜　「栗林さんがまとめたみたいです。戦闘に役立つかもしれないです！」
大永　「そうね。これなら少しは戦い易くなりますね。」
大永は呟いた。以前の第二次い号作戦の成功により影の艦隊は大部分の航空戦力を喪失していた。よって現在艦娘へ攻撃ができる航空隊は富嶽爆撃隊程度だ。さらにその富嶽爆撃隊も飛行場からではないと出撃ができない。発進前に飛行場を無力化すれば自衛隊は救助中に爆撃隊の攻撃を受けることはない。
十六夜　「ん？なんですか。この〝影化〟って？」
十六夜は資料に書いてあったことが気になったようだ。
出羽　「そうですね。なんでしょうか。」
大永　「そうね。私も気になったわ。」
そう会話をしていた。すると
立春　「あ、あれは…」
十六夜　「？どうしたの、立春。」
十六夜がそう聞くと、立春は空を指さした。そこには…

空を埋め尽くすほどの、影の富嶽が飛行していたのだ…

十六夜　「嘘っ!?もうこんなに!」
十六夜が叫んだ。それにそれだけではない。ただでさえ多い富嶽にそれを上回る数の護衛機がついているのだ。影の橘花だ。
出羽　「そんな…。ツラギ島の飛行場なら第一艦隊と第二艦隊が艦砲射撃で無効化しているはずじゃ…。」
大永　「それにこの距離ならこの海域までだいぶ時間がかかるはずよ。…一体どうして…。」
大永はいつものようにクールな表情を保っているが、内心焦っている。ツラギ島から離れたこの海域までは富嶽でも高速を誇る橘花でもだいぶ時間がかかる。なのに第七艦隊がいる海域から目視で確認できるのだ。まるでこちらの動きを知っているかのように…
曙　「もしかして…!」
馬見ヶ崎　「?どうしたんですか?」
曙　「情報が漏れてたんじゃ…」
全員　「!!?」
実は曙の思う通りに情報が漏れていたのだ。影の艦隊は呉鎮守府の暗号を解読、三号作戦の詳細を確認し、早めに富嶽爆撃隊を発進させていたのだ。
大永　「稼働機、発艦開始!!」

大永が富嶽迎撃のために烈風を発艦させる。馬見ヶ崎も水戦強風を発艦させる。十六夜や出羽たちは対空戦闘の用意をする。ガダルカナル島への爆撃は阻止しなくてはならない。

出羽　「こちら第七艦隊旗艦出羽！我、敵爆撃隊の大編隊を確認す。これより対空戦闘に移行します！」

ショートランド泊地の司令部に出羽は連絡をする。たった今、十六夜たち第七艦隊の戦闘が開始された。

ショートランド泊地　司令部

大淀　「第七艦隊旗艦出羽より入電！我、敵爆撃隊の大編隊を確認す。これより対空戦闘に移行する、とのことです！」

提督　「富嶽爆撃隊か！なぜだ…。今頃ツラギ島は第一艦隊と第二艦隊の艦砲射撃で無効化にしているはず…」

栗林　「確かにたったさっき第一、二艦隊から飛行場制圧の入電があるました。しかし、恐らくこの富嶽爆撃隊は艦砲射撃が開始される前に発進してきたものだと思われます。」

長門　「まさか、我々の動きが読まれていた…？」

栗林　「十中八九そうだと思います。」

提督　「栗林が言うことはだいたいあっている。まずいな。」

栗林　「無事だといいですね。」

提督　「ああ…」

出羽　「主砲五式弾装填！主砲斉射、てっーーーーーーーーー!!」

出羽が三式弾の改良型対空砲弾〝五式弾〟を発射する。発射された五式弾はちょうど富嶽爆撃隊の編隊の上空で炸裂した。炸裂した五式弾の弾片が影の富嶽に降り注ぐ。

出羽　「敵爆撃隊炎上！数機撃墜確認！」

しかし、まだまだ富嶽はかなりの数がいる。そして馬見ヶ崎は気づいた。

馬見ヶ崎　「あの…あれって、雷撃機じゃないですか…？」

そうなのだ。富嶽はすべてが爆装ではない。半機程が雷装機なのである。雷装機は航空魚雷を二十本搭載可能であり、反復攻撃が可能である。艦隊にとって大きな脅威だ。

十六夜　「降下してきてる～！」

曙　「早く落とさないと！」

降下してくる富嶽に大永が先程発艦させた烈風が襲いかかった。しかし、富嶽もやられてばかりではない。防護用に搭載されている12．7mm連装機銃で迎撃を開始した。上空に弾幕が張り巡らされる。それでも果敢に烈風は影の富嶽に突撃していく。

果敢な烈風隊の攻撃により多くの富嶽を撃墜した。しかし、残りはまっすぐと雷撃高度をとりながら接近してくる。

影の富嶽　「我、雷撃ヲ開始スル…」

立春　「魚雷がきます！」

「ッテ!!」

次々と魚雷が投下されていく。何十本もの魚雷が雷跡を描きながら第七艦隊へと接近してくる。

出羽　「各艦、回避行動をとってください！」

十六夜たち駆逐艦は難なく魚雷を回避していった。空母である大永も重巡である馬見ヶ崎も魚雷の回避に成功した。

しかし、出羽は魚雷二本を被雷してしまった。

出羽　「くっ…」

十六夜　「出羽さん！大丈夫ですか！」

出羽　「大丈夫。戦艦は簡単に沈みません。」

なんとか富嶽爆雷撃隊の攻撃をしのぎきった。しかし、すでに飛行場は制圧済みであるため、反復攻撃を仕掛けることはできない。

大永　「これでなんとか富嶽の攻撃はしのぎきりましたね。」

すでに護衛の橘花も富嶽の空襲の終了とともに離脱している。どちらにしろ富嶽と橘花が帰るべき飛行場はすでにない。

ツーツー

無線連絡がきた。出羽がでる。

出羽　「はい、こちら第七艦隊旗艦出羽です。」

栗林　「出羽さん、そちらの被害は大丈夫ですか？」

出羽　「はい、私は被雷しましたけど戦闘に支障はありませんし皆さんも無事です。」

栗林　「そうですか。たったさっき第一艦隊と第二艦隊から飛行場を制圧したと入電がありました。もう富嶽爆撃隊の攻撃を受けることはないと思います。」

出羽　「分かりました。こちらも富嶽と橘花は撃退したのでこのまま護衛作戦を続行します。」

栗林　「…橘花ですか？」

出羽　「？はい。どうしたんですか？」

栗林　「飛行場から富嶽が発進したのは確認しましたが、橘花は偵察機の情報によると飛行場には配備されていないんです

…」

出羽　「…それじゃあ、あの橘花は一体どこから…」

ツラギ島近海

金剛　「ふ～、なんとか飛行場は制圧できましたネ～。」

比叡　「そうですね、金剛お姉さま！」

金剛たち第二艦隊は飛行場射撃を終了し、ガダルカナル島近海の第七艦隊と合流し、ともに哨戒任務をするために航行していた。

霧島　「…静かすぎますね…。」

そのとおりだ。影の艦隊の潜伏海域にしては静かすぎる。潜水艦が潜んでいる可能性も否定はできないが、対潜電探には感はない。よってこの海域には潜水艦はいない。

榛名　「金剛お姉さま。第七艦隊が現在飛行場から発進してきた富嶽爆雷撃隊の攻撃をしのぎきったと連絡がきました。」

金剛　「そうですカー!!それは良かったデース！」

霧島　「……」

金剛　「？霧島、どうしたデース？」

霧島　「あっ、いえ。すこし考え事をしていただけです。」

金剛　「そうデスカー。」

霧島はとある可能性を懸念していた。先程制圧した飛行場には整備されていない橘花が第七艦隊に空襲を行ったことだ。もしかした

ら潜水空母七百型よりも隠密性に優れており、同時に航空機搭載機数が多い影の艦隊がいるのでは？
それが霧島の抱いた懸念だ。それに今朝、作戦が始まる前に栗林からこのようなことを言われていた。
回想
栗林　「昨晩、詳細不明の影の艦隊を偵察機が発見しました。」
霧島　「詳細不明…ですか？」
栗林　「はい。蒼永、大永さんの艦上偵察機〝彩雲〟の報告によりますと大型の人形の艦であると分かっています。さらに両腕に飛行甲板らしきものも装備していたことが分かりました。」
霧島　「空母…でしょうか？」
栗林　「そうかもしれません。しかし、詳しいことはまだはっきり分かっていないので慎重に作戦にあたってください。」
霧島　「…はい。」
回想終了
霧島　「(飛行場にはないはずの橘花…。間違いない。栗林補佐官の言っていた影の艦隊から出撃してきたものに違いない。)」
霧島がそう確信した。

その時

比叡　「右舷！雷跡多数!!」
金剛　「!?」
なんと電探に反応が無いにも関わらず、複数の魚雷が接近してきたのだ。慌てて金剛たちは回避行動をとる。

榛名　「電探に反応がないのにどこから…！」
榛名の言う通り、電探には今だに反応がない。しかし、この海域になにかがいるのは確かだ。
しかし、実際に魚雷が接近してきているのだ。それにかなり大型の魚雷だ。
比叡が一発の魚雷を回避した。その時、信じられないことが起きた。

避けたはずの魚雷が弧を描くように旋回し、再び比叡に接近してきたのだ。
比叡　「えっ!?」
油断していた比叡に魚雷は容赦なく突っ込んでいった。
比叡　「ひえええええええええええええええええ!!」
比叡が被雷。急所に命中こそしなかったものの中破した。
金剛　「比叡!!大丈夫デスカー!!」
比叡　「お姉さま、なんとか大丈夫です…」
霧島　「魚雷が曲がった…！」
霧島は魚雷が曲がったことに衝撃を受けている。その時
榛名　「で、電探に反応あり！敵艦隊です！」
全員　「!!」
とうとう影の艦隊が姿を現したようだ。電探には複数の艦影が映し出されている。
金剛　「遂に来たデスネ…」
遂に遠方から影の艦隊が現れた。五隻の編成のようだ。中央に大型の艦がおり、その周りを潜母７００型が守るように航行している。
金剛　「敵艦発見！砲撃開始デース!!」
妹たち　「はい！お姉さま！」

金剛たち第二艦隊が一斉に砲撃を開始した。砲撃に気がついたのか、中央の大型艦が回避行動をとる。それに従い潜母７００型たちも回避行動を行う。
初弾が着弾した。命中弾はなかったが、夾叉弾が確認された。
霧島　「初弾夾叉…。次はいけます！」
比叡　「気合い入れて、撃ちます！」
さらに第二斉射を行う。対する影の艦隊は少しずつではあるが第二艦隊に近づいていく。

潜母７００型　「～～様！コレ以上近ヅクト、被弾ノ可能性ガ高マリマス！」
???　「関係ない。十分近づいてから魚雷を放射状に放て。そのあと航空攻撃でとどめを刺す。」
潜母７００型　「了解シマシタ！」

榛名　「ちょこまか動いて当たりません！」
金剛　「視界も悪くなってきたデース！」
戦闘を続ける内に夜になってしまったようだ。敵艦隊の補足が難しくなった。
そして

???　「魚雷発射。」
???の指令で四隻の潜母７００型から魚雷が発射された。暗闇の中、高速で魚雷が進んでいく。

金剛　「榛名！右舷から魚雷接近デース!!」
榛名　「分かっています！」
放たれた魚雷を回避すべく榛名は回避を行う。

潜母７００型　「!?魚雷全弾カワサレマシタ！」
???　「…分かった。夜戦攻撃用意。」
???がそう命令を出す。すると潜母７００型たちに異変が起きた。
全身に赤く光る線が浮かび上がったのだ。一本だけではない。体に四本ほどの赤く光る線を発現させたのだ。
その様子を金剛たちは見ていた。
金剛　「な、なんですかアレは…」
霧島　「赤く、光っている…？」
潜母７００型　「がああああああああああああああああああああ!!」
潜母７００型が咆哮を上げる。そして口内からカタパルトを出現させた。
比叡　「艦載機を発艦させる気!?」
霧島　「そのようね。早く攻撃を…」
すると一隻の潜母７００型が口を開いた。
潜母７００型　「オマエ達艦娘如キニ、コノ〝潜水空母影姫〟様に勝テル訳ガナイ…」
金剛　「潜水空母…」
霧島　「影姫…」
比叡　「（何…影姫って…。そんな艦艇が影の艦隊にいるなんて。）」
比叡が思考を巡らす。おそらく深海棲艦で言う鬼級や姫級のようなものだろうと解釈した。
潜水空母影姫　「この海域は、誰も通さない…。そのまま…鉄底

海峡に沈みなさい…。」
言うが早いか、潜水空母影姫の装備する飛行甲板から大量の艦載機が発艦してきた。影の橘花だ。
霧島　「橘花！やっぱり第七艦隊を空襲したのは…」
潜母７００型　「フフフ、ヨクゾ気ガツイタナ…。オマエ達ハ誰ニモ気ガツカレナイママ、沈ンデイクノダ…」
影の橘花が第二艦隊へと突撃していく。榛名が三式弾を装填し、対空射撃を行う。しかし、ジェット戦闘機である橘花はその高速性能を生かして、いともたやすく回避していく。
榛名　「くっ…」
遂に影の橘花が第二艦隊に向け、爆弾を投下する。
比叡・霧島　「きゃあああああああああああああああああああ!!」

切り離された爆弾は、比叡と霧島を狙って投下された。爆弾が二人に直撃し、二人が悲鳴を上げる。
金剛　「っ！よくもやってくれましたネ～～～～～～～～～!!」
金剛が潜水空母影姫を狙って砲撃する。放たれた砲弾は潜水空母影姫に命中するかに見えたが、なんと一隻の潜母７００型が砲弾を受けたのだ。
潜母７００型　「がああああああああああああああああああああああああああああ!!」
潜母７００型が叫び声を上げながら撃沈された。
潜水空母影姫　「……」
目の前で仲間が撃沈されたのにも関わらず、潜水空母影姫は顔色一つ変えずに立っていた。
潜母７００型　「影姫様ヲ守ルノガ、ｅｌｉｔｅ（エリート）デアル我々ノ任務ダ。影姫様ニハ指一本触レサセナイ…」
金剛　「くっ…」
潜水空母影姫　「もうこないのか？ならこちらからいかせてもら

うぞ…」
潜水空母影姫がそう言うと、すでに大破している比叡と霧島に複数の砲を向けた。おそらく１０ｃｍ単装砲だ。
潜水空母影姫　「ここで沈んでいきなさい。…私のように…」
潜水空母影姫が引き金を引いた。

ショートランド泊地
司令部
大淀　「第二艦隊からの通信が途絶えました！」
提督　「なんだと！」
大淀からの報告に提督は声を上げた。通信が途絶えたということは無線機がやられたということだ。無線機がやられたと言うことは、中破以上の損傷を負っているということだ。
栗林　「夜になっています。影の艦隊に夜戦を仕掛けるのはそうとうまずいですね。」
響　「どうしてですか、栗林さん。」
予備艦として待機していた響が栗林に聞く。
栗林　「影の艦隊について調べて色々なことが分かった

んです。もともと日本海軍は夜戦が得意でした。」
提督　「それはだいたいは分かっているな。」
栗林　「さらに影の艦隊は夜戦にさらに特化した艦艇が揃っていたのです。」
響　「つまりさらに夜戦時に、攻撃力が上がったりするのかい？」
栗林　「まあ、そういうかんじですね。」
提督　「無事に帰ってきてくれればいいが…」

ガダルカナル島　近海
暁　「敵艦隊発見!!」
暁が探照灯を影の艦隊に照射する。探照灯の光に照らされた影の艦隊の駆逐十六型が、光源に向けて集中砲火を浴びせる。
暁　「きゃああああああああああああああ!!」
被弾した暁が悲鳴を上げる。
夕立　「ぽい～～～～～～～～～～～～～～～～～!!!」
夕立が光に照らされた駆逐十六型に砲撃する。
駆逐十六型　「があああああああああああああああああああああ!?」
二隻の駆逐十六型が咆哮を上げて轟沈する。
重巡二十一型　「この程度で我々を沈めることはできない…」
重巡二十一型が口を開く。そのまま砲撃を行う。
吹雪　「くっ…」
重巡二十一型の放った砲弾を、吹雪は回避する。
重巡二十一型　「くっ、ちょこまかと…。」

重巡二十一型は高速で回避行動を行う駆逐艦娘を捉えきれないようだ。しかし、軽巡になれば話は別だ。
軽巡二十型　「喰ラウガイイ!!」
軽巡二十型が１５ｃｍ三連装砲を放つ。重巡二十一型より弾道の初速が速いため、回避行動を行っていた吹雪に直撃した。
吹雪　「きゃあああああああああああああああ!!」
吹雪が悲鳴を上げる。
夕立　「吹雪ちゃん～～～～～～～～～～～～!!」
夕立が叫ぶ。その時、
重巡二十一型　「その間、もらったぞ…」
夕立に向かって重巡二十一型が砲撃する。
夕立　「!!」
とっさに夕立は回避したが、夾叉弾の影響により速度が落ちてしまった。
重巡二十一型　「ふっ、避けたか。やるじゃない。でも、次は確実に仕留める…」
重巡二十一型が不敵な笑みを浮かべる。
夕立　「かなりまずいっぽいっ…」
もはやこの艦隊で無傷な駆逐艦は夕立くらいだ。先の重巡二十一型や軽巡二十型の砲撃、駆逐十六型の雷撃によりほとんどが深刻な損傷を負っている。
綾波　「(昼間戦闘に比べて赤い線が浮いて攻撃力が高くなってる…。特に駆逐艦や軽巡、重巡も…。)」
冷静に綾波は分析しているが、自身もすでに先程戦艦百十型の砲撃を受け、中破の損傷を受けている。
軽巡二十型　「ソンナニヨソ見ヲシテイテ大丈夫ナノカ?」
綾波　「!?」
突然、軽巡二十型が背後に回り込み、魚雷を放った。
綾波　「くっ…」
直撃こそしなかったものの損傷は激しい。なぜなら駆逐艦に魚雷

だ。直撃しなくてもかなりの損傷になる。

吹雪　　　「(このままじゃ、作戦どころじゃ…)」

吹雪たち第一艦隊も飛行場制圧後、影の艦隊の偵察機に発見され現在のような状況に陥っている。多数の影の艦隊の駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、さらには戦艦までもいる。

重巡二十一型　「フフフ、喰らいなさい!」

重巡二十一型が被弾し、速度が落ち、攻撃もままならない状況の吹雪に向かって主砲を撃つ。放たれた砲弾は影の力を秘めながら、吹雪に直撃した。

吹雪　　　「きゃあああああああああああああああああああああ!!!」

吹雪が悲鳴を上げる。すると異変が起き始めた。

吹雪　　　「(なにこれ…。全然体が動かない…。手に力が入らない…。どうして…)」

重巡二十一型　「次はお前だ!!」

そう言って、重巡二十一型は回避行動を続ける夕立に砲撃を行う。今までの砲弾とは全然違う影の砲弾が夕立に襲いかかる。

夕立　　　「ぽいぃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!!?」

遂に夕立も被弾した。

影の砲弾は、史実では命中させせた敵艦の艦内で炸裂するように設計された対水上戦闘用の〝三式弾〟であった。艦内で炸裂するため、弾薬庫に被弾した場合、瞬く間に爆沈させせるほどの威力を誇っている。

夕立　　　「うう…、手に力が入らないっぽいっ…」

まるでソロモン海の戦いのように次々と艦娘たちが戦闘不能の状況に陥っている。

さらに水中からなにかが現れた。なんと先程まで第二艦隊を攻撃していたあの潜水空母影姫である。

潜水空母影姫　「どうだ？」

潜水空母影姫が、重巡二十一型に声をかける。

重巡二十一型　「はい。ほとんどの駆逐艦を大破状態にさせました。」

潜水空母影姫　「分かった。とどめを刺す。」

潜水空母影姫が全主砲を大破した艦娘たちに向ける。重巡二十一型も軽巡二十型も砲を艦娘たちに向ける。

綾波　「（このままじゃ…）」

夕立　「（どうしようもないっぽい…）」

吹雪　「（もうだめ…）」

吹雪たちが死を覚悟した。

その時

軽巡二十型が次々と沈んでいった。

重巡二十一型　「!!?」

潜水空母影姫　「なにごとだ？」

???　「これ以上はやらせない!!」

一人の艦娘がそう叫んだ。

吹雪　「いっ、十六夜ちゃん!!」

そうだ。十六夜だったのだ。当然第七艦隊もいる。

大永　「私達がいない間に随分好き勝手してくれたみたいね。」

曙　「これ以上は勝手はさせないわ！」

出羽　「そのとおりです！」

馬見ヶ崎　「…はい。」

十六夜　「ここからは、私達の出番よ!!」

反撃が始まる。

我、夜戦に突入す

第三部　闘い、そして終戦

ショートランド泊地

大淀　「第七艦隊より入電！我、これより夜戦に突入す。」

提督　「間に合ったみたいだな。」

栗林　「そうですね。第七艦隊を応援に送ったのは正解でしたね。」

提督　「損傷の激しい艦は早急に帰還するように伝えろ。撤退時は援護する。」

大淀　「了解しました。」

大淀が返事をし、電信を打つ。

栗林　「やっぱり影の艦隊相手に夜戦は無謀でしたね。」

提督　「ああ、かなりの艦娘が被弾していると思う。これ以上戦闘を続けたら轟沈の危険性もある。」

栗林　「そうですね。それだけは避けなければなりませんね。」

提督　「十六夜の一件もあるからな。…あいつ、無理しなければいいが…」

ガダルカナル島　近海

次々と砲撃音が轟く。第七艦隊と潜水空母影姫の戦闘が激化していた。

出羽　「全主砲、斉射！てーーーーーーーーーーーー!!」

５１ｃｍ連装砲が爆音を轟かせながら火を吹く。放たれた砲弾は重巡二十一型に命中した。

重巡二十一型　「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!」

重巡二十一型はそのまま轟沈していった。

十六夜　「よし、数は少しづつ減らせてる！」

先程まで第一艦隊を蹂躙していた潜水空母影姫率いる、影の艦隊の水上打撃艦隊はあっという間に壊滅状態になっている。

潜水空母影姫　「ふっ、なかなかやるな…」

潜水空母影姫が不敵な笑みを浮かべる。

立春　「栗林さんの言っていた強力な影の艦隊ってこのことだったんだ…」

馬見ヶ崎　「私、あんなのとやりあえる力なんて全然ありませんよ…」

馬見ヶ崎はかなり弱気だ。

大永　「しかし、夜間でも攻撃隊出せるのはかなり有利ですね。」

大永がそう言いながら、艦載機を発艦させる。（蒼永型空母は夜間航空隊を艦載させていた）

彗星艦爆と流星艦攻が闇を切り裂いて飛行する。

潜水空母影姫　「（夜間攻撃…。なるほど。艦娘の中でも私たちと同等の力を持つものが存在するのね…。）」

潜水空母影姫も迎撃に艦載機を発艦させる。影の橘花だ。影の橘花は高速性能をいかして流星と彗星に向かっていく。

十六夜　「させない!!」

十六夜が影の橘花に向け、１３ｃｍ連装高角砲を放つ。対艦対空にも優れた１３ｃｍ連装高角砲は攻撃隊に向かっていく影の橘花を次々と撃墜していった。

潜水空母影姫　「!!?」
これには潜水空母影姫も驚愕する。
無傷の攻撃隊はまっすぐ潜水空母影姫に向かっていく。
潜水空母影姫　「ふんっ。」
突然、潜水空母影姫は海中へと潜航を始めた。潜母７００型たちもそれに続く。
曙　「敵艦潜航!!」
曙が叫ぶ。潜水空母影姫は潜水艦のため、海中に潜航、移動することが可能である。しかし、潜水空母は所詮潜水艦のため、基本的に防御力は弱い。
十六夜　「爆雷戦開始!!」
十六夜が対潜爆雷〝五式爆雷〟を投射する。
米海軍の対潜爆雷ヘッジホッグを真似てつくられた五式爆雷は、九五式爆雷や二式爆雷よりも高性能な対潜爆雷として十六夜型駆逐艦に搭載された爆雷だ。（架空の兵器です）
五式爆雷が宙を舞い、海面に着水する。海面に着水した五式爆雷は、高速で潜水空母影姫が潜航している深度まで到達した。
潜母７００型　「!?」
五式爆雷は一隻の潜母７００型の脇で炸裂した。
潜母７００型　「がああああああああああああああああああああああ!!?」
爆雷攻撃を受けた潜母７００型はそのまま轟沈した。
潜水空母影姫　「ふっ、新兵器か…。面白い…」
水中を潜航しながら潜水空母影姫は爆雷攻撃をかわしていく。潜母７００型たちは五式爆雷の攻撃を完全には避けきれず、数隻が撃沈され、残った二隻も中破の損傷を負った。
立春　「手応えはあったけど、浅い…」
立春の言う通り、潜母７００型たちに深刻な損傷を与えることはできたが、潜水空母影姫には全く損傷を与えられなかった。
潜水空母影姫　「これで終わりか…。ならこちらからいくぞ…」
潜水空母影姫が発射管から多数の魚雷を放つ。…いや、魚雷ではな

い。それは通常の魚雷を二周りほど大きくしたような兵器だ。

それは、旧日本海軍が九三式三型酸素魚雷を改造してつくられた日本軍初の特攻兵器、
〝回天〟だったのだ…。

回天は、九三式三型酸素魚雷を改造してつくられた日本軍初の特攻兵器だ。内部には操縦席が設けられ、搭乗員は潜望鏡を見ながら敵艦を補足、そのまま操縦を行い、敵艦に乗員もろとも衝突するというものだった。

先程第二艦隊を襲撃し、比叡に向けて発射された魚雷がこの〝影の回天〟だったのだ。

影の回天は、潜母７００型の艦載機と意識を共有できるように、潜水空母影姫とも意識を共有することができる。そのため、とてつもない命中率を誇り、命中すれば戦艦であろうと大破にまで追い詰めることができる。

十六夜　　「回天!?」
大戦末期に建造された十六夜は何回か回天をみたことがあり、その

恐ろしさを十分に知っている。すぐさま発射された回天に向けて機銃を発射した。
水中に次々と機銃弾が撃ち込まれていく。
すると水中爆発が起こった。水中を航行していた影の回天に機銃弾が命中し、破壊することに成功したのだ。
潜水空母影姫　「…破壊されただと？」
影の回天と意識を共有していた潜水空母影姫は流石に驚きの表情を浮かべる。
十六夜　「危なかった…」
十六夜が安堵の表情を浮かべる。しかし、油断してはいなかった。
十六夜　「（回天は破壊した。だけどまだ残数が残ってるはず…。でもこっちにはもう爆雷が残っていない。潜航してる敵に砲撃も雷撃も効かない…）」
五式爆雷は先程の戦闘ですべて使い切ってしまったのだ。五式爆雷は攻撃力に優れているが、大型のため多くは搭載できない。
十六夜　「みんな！爆雷は残ってる!?」
立春　「もう残っていません…」
曙　「私ももう全部使い切ったわ…」
どうやら第七艦隊の駆逐艦はすべての爆雷を使い切ってしまったようだ。
大永　「私は航空爆雷は残ってるけど、搭載できる艦載機は残ってないわ…」
馬見ヶ崎　「私もです…、ごめんなさい…。」
大永も馬見ヶ崎もお手上げのようだ。
十六夜　「（どうしよう。このままじゃ…）」
十六夜が頭を抱えた。

その時

どこからともなく〝なにか〟がものすごい勢いで海中に着弾した。

十六夜　「!?」

そして次の瞬間、巨大ば水中爆発が起こり水柱が上がった。

曙　「一体なに!?」

曙が驚く。

???　「またせたね。」

誰かの声がした。第七艦隊全員が振り向くと、そこには…

予備艦としてショートランド泊地にいるはずの響だった。

十六夜　「響!?なんでここに!」

響　「説明はあとだよ。今はあの影の艦隊を倒さないと。」

響が十六夜の声に答え、背部に背負っているＶＬＳ発射装置の発射

扉を開く。
響　「アスロック発射!!」
発射装置から対潜ミサイル〝アスロック〟が発射された。先程の高速で海中に着弾したのはアスロックだったのだ。
海中に着弾し、アスロックは潜航を始めた。そのまま潜水空母影姫に向かっていく。
潜水空母影姫　「なんだ…あれは…。あんな兵器はみたことがない…!」
さすがの影の艦隊で強力な力を誇る影姫も、２０世紀に開発された兵器の存在は知らないようだ。もちろん対抗方法も知るわけがない。
探信音を放ちながら、アスロックは潜水空母影姫へと直撃した。

潜水空母影姫　「ぐあああああああああああああああああああああああああああ!?」
潜水空母影姫が悲鳴を上げる。
それと同時に巨大な水柱が上がる。
曙　「やった…!」
響　「まだだよ。」
響はさらに短魚雷を放つ。放たれた短魚雷は先程のアスロックの命中で水中で動きを止めている潜水空母影姫に迫っていく。
潜水空母影姫　「くっ、魚雷か…。まだかわせる力は残っている。」
潜水空母影姫は突進してくる短魚雷を回避した。

しかし、短魚雷は第二次大戦で使用された直進魚雷とはわけが違う。コンピューター制御により、確実に命中するようになっているのだ。

短魚雷をかわし、油断した潜水空母影姫に６本の短魚雷は容赦なく銛のように突っ込んでいった。
直撃の瞬間、潜水空母影姫はこう言った。

潜水空母影姫　「私を沈めたことを…必ず、後悔させてみせる…覚悟…しろ…」

６本の短魚雷が命中し、潜水空母影姫は複数の影の回天と影の橘花とともに海の底へと消えていった。

響　「反応消滅…。敵艦撃沈確実。」
対潜ソナーの反応消滅をみて響が呟いた。
十六夜　「ほんとに？やったーーーーーーーーーーーー!!!」
出羽　「よかったです！」
曙　「ふぅ～、一時はどうなるかと思った…」
第七艦隊全員が海域攻略に喜んだ。これでガダルカナル島周辺の海域の制海権が確保されたのだ。
大永　「とにかく敵主力は撃破したわね。」
立春　「早くショートランドに戻りましょう！」
馬見ヶ崎　「そうですね…。私のせいでまた何かが来ないうちに…」
今だに馬見ヶ崎はネガティブだ。

ショートランド泊地
工廠
北村北斗　「いや～、これはひどいな…。」
北村が命からがら帰投した吹雪たち第一艦隊と、金剛たち第二艦隊の損傷具合をみて顔をしかめた。
夕立　「北村さ～ん、どうっぽいっ？」
損傷の激しかった艦娘の一人の夕立が北村に聞く。まだ体中に包帯が巻かれ、痛々しい姿だ。
北村北斗　「言いづらいですけど、はっきり言ってもう艤装は取り付けることはできませんね…。」
吹雪　「それって…」

北村北斗　「除隊待ちの状態です。遠回りに言ってもう戦うことはできませんね。」
霧島　「そ、そんな…」
確かに影の艦隊のＥｌｉｔｅ艦隊と戦闘を行い、かなりの損傷を負い、さらに続けて第一艦隊と第二艦隊は影の艦隊のなかで強大な力を持つ潜水空母影姫とも戦ったのだ。いくつもの無理が重なり、彼女たちの体は限界を迎えていたのだった。
北村北斗　「残念ですが、艤装が取り付けることができなくなった以上、皆さんにさらなる無理をさせるわけにはいきません。」
北村の声が、工廠内にこだました。

三号作戦の結果は、ガダルカナル島に取り残された多国籍軍は無事に海上自衛隊、航空自衛隊により救助、周辺海域の制海権確保に成功した。

しかし、犠牲も多かった。艦娘がなんと吹雪、綾波、暁、夕立、巻雲、高波、照月、古鷹、加古、比叡、霧島の１１人が深刻な損傷を負い、轟沈こそしなかったものの除隊に追い込まれる結果となった。

ショートランド泊地　飛行場
提督　「成功ばかりではなかったな。」
栗林　「そうですね。覚悟していたことですがまさかこ

こまでとは予想していませんでした。」
提督　「俺もだ。だが、誰も轟沈しなくてよかった。それだけでも俺は嬉しい。」
提督がさらに言葉を紡ぐ。
提督　「俺は自分に起きたことを二度と繰り返さないように、人に同じことが起きないように提督になった。…彼女たちはこの国、いや、この世界の希望だ。俺がしっかりしなければいけない。」
栗林　「そうですね。まずは吹雪さんたちにありがとうと伝えましょう。ブーゲンビル島で待機中ですので急ぎましょう。」
提督　「ああ、そうだな。」
提督が一機の連山に乗り込む。栗林は違うもう一機の連山に乗り込んだ。零戦の護衛が六機ついている。
操縦士　「蒼海提督、それでは離陸します。」
提督　「はい、よろしくおねがいします。」
栗林の乗った連山を先頭に二機の連山と六機の零戦がブーゲンビルに向けて飛び立ってい行った。

鉄底海峡中心部
???　「このままで…済むと…思う…な…」
???が沈みながらつぶやき、艦載機を発艦させる。影の橘花だ。十六機の影の橘花が猛スピードで空を飛んでいく。???はそのまま静かに沈んでいった…

ブーゲンビル島　上空

提督　「ようやく作戦が終わった。それにしても吹雪たちには申し訳ないことをしたな…」

操縦士　「でも、作戦は成功しましたし、戦死者は一人もいませんでしたよ。艦娘の皆さんは頑張ってくれましたね。」

提督　「ああ、そうですね。ブーゲンビルに着いたらねぎらってあげよう。」

通信員　「ええ、それがいいですね。」

先頭を飛行している栗林搭乗の連山が飛行場に到着し、着陸準備に入っているのが見えた。

操縦士　「少佐、蒼海提督と同じ連山じゃなくて大丈夫だったんですか？」

栗林　「ええ、もし敵機に発見されても攻撃を受けやすいのは先頭の機です。提督の身を考えたらこうしたほうが生存性が高いと思いまして。」

操縦士　「そうなんですか!?やはり秀才には敵いませんね～。」

栗林搭乗の連山が飛行場に着陸した。提督搭乗の連山は少し遅れているようだ。

栗林が連山から降りると、十六夜たちが待っていた。

十六夜　「栗林さん～！」

栗林　「十六夜さん。戦闘での負傷は大丈夫ですか？」

十六夜　「もう大丈夫です！」

金剛　「テートクはまだデスカー？」

栗林　「あの連山に乗っていますよ。」

栗林が振り向き、連山を指差す。

その方向には提督が乗っている連山があるはずだ。

その時、栗林は見てしまった。
影の橘花が提督搭乗の連山に群がっている様子を…

提督搭乗の連山が着陸態勢に入ろうとした時に、影の橘花の襲撃を受けた。影の橘花は提督が搭乗しているのを知っているかのように激しい攻撃を始めた。

影の橘花の数は十六機。こちらはすでに着陸した連山と護衛の零戦を含めても八機だ。影の橘花が３０ｍｍ機銃を撃つ。
機銃員　「クッソ～！よくも!!」
機銃員が影の橘花を撃墜すべく機銃を放つ。しかし、高速を誇る影の橘花には機銃弾が当たることはなかった。零戦の奮闘も虚しく連山に攻撃が集中する。
バァン!!
左から爆発音が聞こえた。機銃弾を受け、遂に左エンジンから出火

したのだ。
操縦士　「っ!!どうだ!消火できそうか!?」
整備員　「だめです!!このままではそのうちエンジンが停止します!!」
整備員の悲痛な叫びが機内にこだます。
提督　「……」
不思議なことに提督は冷静だった。叫び声一つ出さずに、席に座っている。

左エンジンから炎を吹き出した連山は、急速に高度が下がっていく。このまま下がっていくと飛行場もしくは海面に激突してしまう。

だが、飛行場はもう目の前だ。
操縦士　「しょうがない!このまま胴体着陸する!」
被弾により車輪が出せなくなったため、胴体着陸を操縦士たちは決行を決意したのだ。
操縦士　「ものに掴まれ～～～～～～～!!」
連山が炎を吹きながら飛行場に向かっていく。
金剛　「大変デース!!!テートクが!!テートクが～～!!」
長門　「落ち着けっ!!着陸したらすぐに救助だ!!」
大慌てする金剛を長門が鎮める。すると

連山が飛行場に接触した。火花が飛び散り、凄まじい音があたりに響く。

そのまま滑走路を滑るように連山は進んでいく。
陸軍兵　「おい!連山が火を吹いてるぞ!消火用意だ!!」
飛行場で待機していた陸軍兵たちが消火器を持って、連山に向かい

全速力で走る。ようやく動きが止まった連山に近寄っていく。
十六夜　「っ……！」
十六夜たちも連山へと近づこうとした。

その時

連山が大爆発を起こした。
陸軍兵たち　「うわあああああああああああああああああああ!!」
近くにいた陸軍兵たちが爆風で吹き飛ばされないように踏ん張る。
十六夜　「くっ……」
十六夜たちも爆風に吹き飛ばされないように踏ん張る。
ようやく爆発が収まった時、十六夜の目の前に何かがひらりと落ちてきた。
十六夜　「!!」
それは提督がいつも被っていた白い軍帽だった…。
十六夜　「提督……」

陸軍兵たちが消火活動と搭乗員たちの救出を開始した。何人かの連山搭乗員が助け出されていく。ほとんど全員がやけどを負っている。しかし、その中に提督の姿はなかった。

栗林　「……」

栗林は空を見上げる。提督の連山を撃墜した影の橘花がゆうゆうと飛び去っていく。その姿を栗林はただただ呆然とみていることしかできなかった…。

第二章　完